

# Ps 138:24 における *via* の訳語としての古英語 *weg* について

石 原 覚

## I

以下は、神による導きへの嘆願が述べられたウルガータ (Vulgata)<sup>1</sup> の詩篇の一節である。ここでは「道」を意味する名詞 *via* の奪格が前置詞 *in* の後ろで用いられている。

(1) *et vide si via iniquitatis in me est et deduc me in via aeterna* (Ps 138:24)<sup>2</sup>

(そして私に不正の道があるかないかを見、私を永遠の道において導き給え。) ラテン語 *via* と、古英語で同じく「道」を意味する名詞 *weg* とは、組織的な対応関係にあり、上記の箇所での *in* に支配された *via* も、古英語の詩篇行間注解 (Psalter glosses)<sup>3</sup> において *weg* へと訳されている。

ここで注意しなければならないのは、A, B, C, E, F, G, I, J, K のラテン文においては、(1) に見られるごとく、*in* の後ろに *via* の奪格が現れているが、唯一 D のラテン文では、以下のように、*in* の後ろに *via* の対格が現れている事実である。

(2) ... *et deduc me in uiam aeternam*

(……私を永遠の道へと導き給え。)

本稿では、古英語の詩篇行間注解において、(1) の *via* の奪格が忠実に *weg* の与格へ訳される場合、ウルガータに繰り返し現れるある表現におけるのと類似した用法の *via* が古英語に反映されているということ、それに対して D では (2) の *via* の対格がそのまま *weg* の対格に訳されることにより、そのウルガータの表現から逸脱した形で使われた *via* が古英語に反映されているということを指摘したい。

## II

古英語 *weg* とラテン語 *via* の基本的な語義を確認することから始めよう。

まず *weg* は、例えば次の (3)(4) におけるように、往来の場所としての「道、道路」の意味で用いられる。

(3) & þone *weg* letan butan ware, þæt seo fierd siððan þær þurhfor. (Or 4 6.93.3)<sup>4</sup>

（彼らはその道が無防備なまま放棄し、その後軍隊がそこを通過した。）

(4) & hi ða comon to ðære stowe þær se blinda man sæt be þam *weg*e: (ÆCHom I, 10 259.31)<sup>5</sup>

（それから彼らは、その盲人が道端に座っている場所へとやって来た。）

次いで *weg* は、(5)(6) におけるごとく、「道程、旅」<sup>6</sup> の意味で用いられる。

(5) þonne hie on flodes fæðm ofer feorne *weg* on cald wæter ceolum lacað. (And 252)<sup>7</sup>

（彼らが海原で、遠い道のりを、冷たい水の上で、船に乗って揺れ動くとき、）

(6) þæt þu gesecege sweostor minre, þære leofestan, on longne *weg* to þam fægran gefean forðsið minne, on ecne eard, (GuthB 1179)

（私の最愛の妹に、長い道のりへの、素晴らしい喜びへの、永遠の故郷への私の出立を伝えるために、）

さらに *weg* は、(7)(8) に見られるように、比喩的な「道」、すなわち「行い、生き方」の意味で現れる。

(7) þanon lifes *weg* siðe gesohte, swegle dreamas, beorhtne boldwelan. (Fates 31)

（そこから彼は死において命の道を、天上の喜びを、輝かしい住処を求めた。）

(8) Iu ic wæs geworden wita heardost, leodum laðost, ærþan ic him lifes *weg* rihtne gerymde, reordberendum. (Dream 87)

（かつて私は刑具のうち最も残酷なもの、人々に最も嫌悪されるものとなったが、ついに私は真の命の道を彼らに、人間たちに開いた。）

ラテン語 *via* も、(9)(10) におけるごとく、まず通行の場所としての「道、道路」の意味で用いられる。

(9) tamen tutius esse arbitrabantur obsessis *viis* commeatu intercluso sine ullo vulnere victoria potiri (Caes. Gal. 3.24.2)<sup>8</sup>

（彼らは道を占拠し、糧食を止め、無傷で勝利を収める方がより安全であると

判断した。)

(10) *Amasa autem conspersus sanguine iacebat in media via* (II Sm 20:12)

(ところでアマサは血まみれになって道の真ん中に横たわっていた。)

また *via* は, (11)(12) におけるように, *weg* と同じく「道程, 旅」の意味を持つ。

(11) *video quot dierum via sit*, (Cic. *Ver.* 3.191)<sup>9</sup>

([その二都市間の] 行程が何日間なのか, 私は知っている。)

(12) *mane facto surrexit homo et aperuit ostium ut coeptam expleret viam* (Idc 19:27)

(朝になり, その人は起きて, 始めた旅路を終えるために戸を開けた。)

さらに *via* は, (13)(14) におけるごとく, *weg* と同様「行い, 生き方」の意味で用いられる。

(13) *cum omnium artium, quae ad rectam vivendi viam pertinerent, ratio et disciplina studio sapientiae, quae philosophia dicitur, contineretur*, (Cic. *Tusc.* 1.1)<sup>10</sup>

(正しい生き方に関するあらゆる技術の体系と教授は, 哲学と呼ばれる英知の研究に内包されているので,)

(14) *non est Deus in conspectu eius inquinatae sunt viae illius in omni tempore* (Ps 9:26)<sup>11</sup>

(神は彼の目の前にはなく, 彼の道はどんな時も汚れている。)

以上見て来たように, *weg* と *via* には共通の語義がある故に, *weg* は通常 *via* を訳すのに用いられる。以下, 上記の基本的な語義のそれぞれにつき *weg* が *via* の訳語となっている例を, 古英語訳とラテン語原文を並べて示そう。(15) においては「道, 道路」の意味で用いられた *via* が *weg* により訳されている。

(15) & efne Godes encgel forstod þone *weg* ðær he wolde ridan mid atogenum sweorde, swilce he hine slean wolde. (Num 22.22)<sup>12</sup>

(すると見よ, 神の使いが, 彼を殺そうとするがごとく, 抜き身の剣を持って, 彼が行こうとしていた道に立ち塞がった。)

*stetitque angelus Domini in via contra Balaam . . .* (Nm)

(主の使いが, バラアムに対して道に立った。……)

(16) では「道程, 旅」の意味を表す *via* を訳すのに *weg* が用いられている。

(16) *Aris hraðe and et, þu hæfst swyþe langne weg.* (ÆLS (Book of Kings) 168)<sup>13</sup>

（早く起きて食べよ。あなたには大変長い道のりがある。）

... grandis enim tibi restat *via* (III Rg 19:7)

（……あなたにはまだ長い道のりあるのだから。）

(17) においては比喩的な「道」の意味で用いられた *via* が *weg* をもって訳されている。

(17) hit is awriten ðæt him wære betere ðæt hi no soðfæstnesse *weg* ne ongeaten, ðonne hi underbæc gecerden, siððan hi hine ongeaten. (CP 58.445.32)<sup>14</sup>

（真実の道を知らなかった方が、それを知った後で逆戻りするよりも、彼らにとっては良かった、と書かれている。）

... Melius erat eis non cognoscere *viam* justitiæ, quam post agnitionem retrorsum converti (GREG.MAG. Reg.past. 3.34, 119A)<sup>15</sup>

（正義の道知らない方が、知った後で逆戻りするよりも、彼らにとっては良かった、……）

### III

Iで示したごとく、Ps 138:24 に対応する古英語の詩篇行間注解のラテン文の箇所においては、(1) の *in* が *via* の与格を伴う形（すなわち位置を表す *in* が *via* を支配する形）と、(2) の *in* が *via* の対格を伴う形（すなわち方向を表す *in* が *via* を支配する形）の、二通りの形が存在する。本章では、それぞれの形が生じた背景について考察したい。

まず問題の箇所のギリシャ語原文を見てみよう。(18) が七十人訳聖書 (Septuaginta)<sup>16</sup> において (1)(2) に対応する箇所である。ここでは、(1) の位置を表す *in* に支配された *via* に対応する、同じく位置を表す前置詞 *ἐν* に支配された *ὁδός* が注目される。

(18) ... καὶ ὁδήγησόν με ἐν ὁδῷ αἰωνία. (Ps 138:24)

（……私を永遠の道において導き給え。）

よって、(1) の *in* が *via* の与格を支配するという形は、ギリシャ語原文の構造に由来するものと考えられる。

一方、(1) において奪格で表されている *via* が、対格で表されているのは、(2)

に示した D のラテン文のみにとどまらない。Cassiodorus (477 頃～ 570 頃)<sup>17</sup> は (2) と同じ「……私を永遠の道へと導き給え」(“... et deduc me in *uiam* aeternam”) を引用し、この箇所について解釈を述べる中で、次のように同じく *deducere* (導く) と方向を表す *in* に支配された *via* を用いている。

Merito ergo humana substantia in aeternam uiam petiit se deduci, in qua diaboli semita non potuit inueniri.<sup>18</sup>

(よって人間的本質は正当に、永遠の道へと導かれることを求め、そこでは悪魔の道が見出され得なかった。)

また Haymo (853 没) も (2) の形を引き、対格を支配する *in* を用いて、以下のごとく解釈を示す。

“et” cum videris in me nullam esse iniquitatem, “deduc me in *viam* aeternam,” id est, in aeternitatem, quæ per me facta est pervia.<sup>19</sup>

(「そして」私に何も不正がないことを見て、「私を永遠の道へと導き給え」、すなわち、私により到達可能となった永遠へと、ということである。)

これらの Cassiodorus および Haymo の記述から、<sup>20</sup> (2) の *in* が *via* の対格を伴うという形は、古英語の詩篇行間注解のラテン文では一種類にしか見られなくとも、偶然に生じた例外的なものではなく、何らかの要因に基づくものであることがわかる。

ここで注目すべきは、このように *deducere* が方向を表す *in* とともに用いられる例が、古典時代の作品において見出される点である。例えば (19)(20) では、それぞれ *conspectus* (視野), *cubiculum* (寝室) の対格が、この動詞とともに用いられた *in* の目的語となっている。

(19) neque ab eo prius Domitiani milites discedunt, quam in conspectum Caesaris *deducatur*. (Caes. Civ. 1.22)<sup>21</sup>

(またドミティウスの兵たちは、彼がカエサルの前に連れて行かれるまで、彼から離れなかった。)

(20) Ubi exceptus benigne ab ignaris consilii cum post cenam in hospitale cubiculum *deductus* esset, (Liv. 1.58.2)<sup>22</sup>

(そこで彼は意図を知らぬ者たちにより好意的に迎えられ、食事の後客用寝

室に導かれたが、)

さらには、まさしく (2) におけると同じく、*deducere* が伴う方向を表す *in* が *via* を支配する例（すなわち「道へと導く」という表現の用例）は、(21)(22)のごとく、古典時代およびそれ以前の時代の文献に見出される。

(21) *qui . . . sic eam firme graviterque comprehenderit ut omnes bene sanos in viam placatae, tranquillae, quietae, beatae vitae deduceret* (Cic. *Fin.* 1.71)<sup>23</sup>

(……それ [この自然の声] をしっかりと、かつ真剣に把握して、十分に分別のあるすべての者たちを、安らかで、静かで、穏やかで、幸せな人生の道へと導いた)

(22) *familiam cum ferreis sarculisque exire oportet, incilia aperire, aquam diducere in vias et curare oportet uti fluat.* (Cato *Agr.* 155)<sup>24</sup>

([雨が降り出したら、] 家中の者たちは鋤と鍬すき くわを持って外に出、排水溝を開け、水を道路へと導き、流れ去るように配慮すべきである。)

以上から、(2) の *in* が *via* の対格を支配するという形は、*deducere* が本来的に有する、方向を表す *in* とともに用いられるという性質に由来するものと考えられる。

#### IV

本章では、古英語の詩篇行間注解において、(1)(2) の問題の *via* がそれぞれいかに訳されているかを見、さらにこれらの箇所箇所の *in* に支配された *via* の意味がそれぞれ古英語に反映されているか否かについて考えてみたい。

(1) の *in* に支配された *via* の奪格は、A では (23) におけるごとく忠実に *weg* の与格に訳され、それは B, F, I, J においても同じである。(C, E, G, K では対格に訳されている。)

(23) . . . & gelaed mec in *weg*e ecum (PsGlA 138.21)

では (23) におけるように、移動を表す動詞に伴う *in* の後ろの *via* の奪格が、そのまま *weg* の与格に訳されるというケースは、行間注解——機械的な直訳が行われた可能性がある——以外にも見出されるであろうか。そこで、同じケースをラテン語からの散文訳に求めると、以下にラテン語原文と並べて示した

(24)(25) を挙げることができる。これらのラテン語原文では、それぞれ (1) の *deducere* と同様に移動を表す動詞である *ambulare* (歩む), *venire* (来る) が、位置を表す *in* と *via* を伴っており、そこに表された「道において」の意味が古英語訳に反映されていると見られる。

(24) *And gif ðu færst on minum wegum and mine beboda hylst. swa swa ðin fæder dyde. ðonne gelenge ic þine dagas; (ÆCHom II, 45 336.36)<sup>25</sup>*

(そしてもしあなたが、あなたの父がそうしたごとく、私の道において歩み、私の命令を守るならば、私はあなたの寿命を延ばそう。)

*si autem ambulaveris in viis meis . . . sicut ambulavit pater tuus . . . (III Rg 3:14)*

(そしてもしあなたが、あなたの父が歩んだごとく、私の道において歩み、……)

(25) *Iohannes com on rihtwisnesse wege & ge ne gelyfdon him; (Mt (WSCp) 21.32)<sup>26</sup>*

(ヨハネは正義の道において来たが、あなたたちは彼を信じなかった。)

*venit enim ad vos Iohannes in via iustitiae . . . (Mt)*

(なぜならヨハネは正義の道においてあなたたちのもとへ来たが、……)

よって、(23) および B, F, I, J の対応箇所では、(1) において *in* と *via* の奪格を持つ「道において」の意味が、古英語に表されていると言える。

(2) の *in* に支配された *via* の対格は、(26) におけるようにそのまま *weg* の対格に訳されている。

(26) . . . & *gelæd me on weg ecne (PsGlD 138.24)*

(26) におけるごとく、移動を表す動詞に伴う *in* に支配された *via* の対格が、忠実に *weg* の対格に訳された例を、行間注解においてではなく、ラテン語からの散文訳において探すと、次にラテン語原文とともに示した (27)(28) が見出される。これらのラテン語原文では、それぞれ (2) の *deducere* と同じく移動を表す動詞の *abire* (立ち去る), *egredi* (出て行く) が、方向を表す *in* と *via* を伴っており、そこに表された「道へと」の意味が古英語訳に表されていると見られる。

(27) *ne fare ge on þeoda weg & ne ga ge innan Samaritana ceastre. (Mt (WSCp) 10.5)*

(異邦人の道へは行くな。またサマリア人の町には入るな。)

*in viam gentium ne abieritis . . . (Mt)*

（異邦人の道へは行くな。……）

(28) Ða eodon þa þeowas ut on þa *wegas* & gegaderedon ealle ða þe hig gemetton, gode & yfele. (Mt (WSCp) 22.10)

（そこでその僕たちは道へと出て行き、善人も悪人も彼らが出会った者たちはすべて寄せ集めた。）

et egressi servi eius in *vias* . . . (Mt)

（そこで彼の僕たちは道へと出て行き、……）

従って、(26) では、(2) において *in* と *via* の対格が持つ「道へと」の意味が、古英語に反映されていると言える。

## V

先に挙げた (24) のラテン文には、「私の道において歩む」 (*ambulare in viis meis*) という表現が見られる。ここで重要なのは、ウルガータにおいて、「私の」が神を指すこの表現が (24) 以外にも 4 箇所<sup>27</sup> に現れること、この表現の「私の」の部分と同じく神を指す「あなたの」となった表現が (29) に見出されること、さらにはそれがやはり神を指す「彼の」となった表現が (30) および 12 箇所<sup>28</sup> に現れることである。

(29) ut timeant te et *ambulent in viis* tuis cunctis diebus quibus vivunt super faciem terrae quam dedisti patribus nostris (II Par 6:31)

（彼らが、あなたが私たちの先祖に与えた地の上で生きる限り、常にあなたを畏れ、あなたの道において歩むようにと。）

(30) ut custodias mandata Domini Dei tui et *ambules in viis eius* et timeas eum (Dt 8:6)<sup>29</sup>

（あなたの神である主の命令を守り、彼の道において歩み、彼を畏れるようにと。）

このウルガータに繰り返し現れる「彼の道において歩む」 (*ambulare in viis eius*) ——最も用例の多いこの形によって以上の表現を代表させることにする——という表現<sup>30</sup> と、問題の (1) の「永遠の道において導く」 (*deducere in via aeterna*) という表現とを *via* に焦点を当てて比較すると、以下の二点を指摘す



ることができる。

1. いずれの表現においても via が、移動を表す動詞に伴う、位置を示す in の後ろで用いられている。
2. 前者の表現では via が神を指す語により修飾されていること、並びに後者の表現における「永遠の道」を Augustinus (354 ~ 430) がキリストになぞらえていること<sup>31</sup>から明らかのように、いずれの表現においても via が、信仰に則した生き方を表すのに用いられている。

これらの二つの事実から、(1) の in の後ろの via は、上記のウルガータに繰り返し現れる表現の via と、その用いられ方が類似していると言える。それに対して——III で示したごとく deducere の本来的用法に基づいて——位置ではなく、方向を表す in の後ろで用いられている (2) の via は、このウルガータの表現から逸脱した形で使われていると認められる。

結論として、古英語の詩篇行間注解において、Ps 138:24 の位置を表す in の後ろの via が忠実に weg の与格に訳される場合は、「彼の道において歩む」(ambulare in viis eius) というウルガータに類出する表現におけるのと類似した用法の via が古英語に表されているということ、他方 D の対応箇所では、方向を表す in の後ろの via がそのまま weg の対格に訳されることにより、このウルガータの表現から逸脱した形で用いられた via が古英語に表されているということが言える。

#### 注

1. R. Gryson et al., *Biblia Sacra iuxta vulgatam versionem*, 4. Aufl. (Stuttgart, 1994).
2. 古英語のテキストの略記と引用の仕方は、原則として、DOE (A. Cameron et al., *The Dictionary of Old English: A to F* (Toronto, 2003)) に従い、ラテン語のテキストのそれは、原則として、同辞典または OLD (P. G. W. Glare, *Oxford Latin Dictionary* (Oxford, 1982)) に従う。なお古英語、ラテン語およびギリシャ語の引用文中のイタリック部分は、すべて筆者によるものである。
3. 古英語の各種詩篇行間注解は A ~ K で表す。それぞれのテキストは以下の通り。A = *The Vespasian Psalter*, S. M. Kuhn (Ann Arbor, 1965); B = *Der altenglische Junius-Psalter*, E. Brenner, AF 23 (Heidelberg, 1908; Nachdr. Amsterdam, 1973); C = *Der Cambridger Psalter*, K. Wildhagen, Bib. ags. Prosa 7 (Hamburg, 1910; Nachdr. Darmstadt, 1964); D = *Der altenglische*

*Regius-Psalter*, F. Roeder, *Studien zur englischen Philologie* 18 (Halle, 1904; Nachdr. Tübingen, 1973); E = *Eadwine's Canterbury Psalter*, F. Harsley, EETS 92 (London, 1889); F = *The Stowe Psalter*, A. C. Kimmens, *Toronto Old English Series* 3 (Toronto, 1979); G = *The Vitellius Psalter*, J. L. Rosier, *Cornell Studies in English* 42 (Ithaca, NY, 1962); H = *The Tiberius Psalter*, A. P. Campbell, *Ottawa Mediaeval Texts and Studies* 2 (Ottawa, 1974); I = *Der Lambeth-Psalter*, U. Lindelöf, *Acta Societatis Scientiarum Fennicae* 35, i (Helsingfors, 1909); J = *Der altenglische Arundel-Psalter*, G. Oess, AF 30 (Heidelberg, 1910; Nachdr. Amsterdam, 1968); K = *The Salisbury Psalter*, C. Sisam and K. Sisam, EETS 242 (London, 1959). これらのうちHは(1)に対応する箇所を欠く。

4. J. Bately, *The Old English Orosius*, EETS s.s. 6 (London, 1980).
5. P. Clemoes, *Aelfric's Catholic Homilies: The First Series, Text*, EETS s.s. 17 (Oxford, 1997).
6. BT (J. Bosworth and T. N. Toller, *An Anglo-Saxon Dictionary* (Oxford, 1898)), s. v. *weg* III には「通過する距離, 旅」(“*space to be traversed, a journey*”)の語義が挙げられている。
7. 古英詩の引用は G. P. Krapp and E. van K. Dobbie, *The Anglo-Saxon Poetic Records*, 6 vols. (New York, 1931–53) による。
8. H. J. Edwards, *Caesar: The Gallic War*, Loeb Classical Library (LCL) 72 (Cambridge, Mass., 1917), p. 170. (9) は OLD, s.v. *uia* 1 の「ある場所から別の場所へと旅行するために造られた道, 道路」(“*A track made for the purpose of travel from one place to another, road*”)に挙げられている例である。
9. L. H. G. Greenwood, *Cicero: The Verrine Orations*, vol. 2, rev. ed., LCL 293 (Cambridge, Mass., 1953), p. 263. (11) は OLD, s.v. *uia* 4 の「旅行すること, またはその例, 旅, 行進など」(“*The fact of travelling or an instance of it, a journey, march, etc.*”)に挙げられている例である。
10. J. E. King, *Cicero: Tusculan Disputations*, rev. ed., LCL 141 (Cambridge, Mass., 1945), p. 2. (13) は OLD, s.v. *uia* 7 の「行動の方針」(“*A course of action or conduct*”)の c 「(uitae などともに) 生き方」(“(w. *uitae*, etc.) *a way or path of life*”)に挙げられている例である。
11. (14) は A. Blaise, *Dictionnaire Latin-Français des Auteurs Chrétiens*, rev. par H. Chirat (Turnhout, 1954), s.v. *uia* 3 の「旅, 人生, 生き方, 振舞い」(“*voyage, vie, manière de vivre, conduite*”)に挙げられている例である。
12. S. J. Crawford, *The Old English Version of the Heptateuch*, EETS 160 (1922; repr. London, 1969).
13. W. W. Skeat, *Aelfric's Lives of Saints*, vol. 1, EETS 76, 82 (London, 1881–85), p. 394. (16) は BT, s.v. *weg* III にラテン文なしで挙げられている例である。ウルガータの対応箇所については A. S. Cook, *Biblical Quotations in Old English Prose Writers*, Second Series (New York, 1903; repr. Folcroft, Pa., 1974), p. 187 参照。
14. H. Sweet, *King Alfred's West-Saxon Version of Gregory's Pastoral Care*, pt. 2, EETS 50 (London, 1871; repr. Millwood, N.Y., 1988).

15. J.-P. Migne, “Regulæ Pastoralis Liber,” *Sancti Gregorii Papæ I, Cognomento Magni, Opera Omnia*, PL 77 (1862), col. 119A.
16. A. Rahlfs, *Septuaginta*, editio altera (Stuttgart, 2006).
17. 以下生没年は T. Wittstruck, *The Book of Psalms: An Annotated Bibliography*, 2 vols. (New York, 1994), vol. 1 による。
18. M. Adriaen, *Magni Aurelii Cassiodori Expositio Psalmorum LXXI–CL*, CCSL 98 (Turnholti, 1958), p. 1253.
19. J.-P. Migne, “Explanatio in omnes psalmos,” *Haymonis Halberstatensis Episcopi Opera Omnia*, PL 116 (Turnholti), col. 667B.
20. なお Wildhagen (p. 394n) は, (2) の形に関連して Cassiodorus の他に, Hilarius (315 頃～368) と Psalterium Romanum (J.-P. Migne, PL 29) を挙げているが, R. Weber による後者のテキスト (*Le Psautier Romain et les autres anciens Psautiers latins*, Collectanea Biblica Latina 10 (Roma, 1953)) では, (2) の形は異読として脚注欄に示されている。
21. A. G. Peskett, *Caesar: The Civil Wars*, LCL 39 (Cambridge, Mass., 1914), p. 32.
22. B. O. Foster, *Livy: History of Rome, Books I–II*, LCL 114 (Cambridge, Mass., 1919), p. 200. (19)(20) および後出の (22) は C. T. Lewis and C. Short, *A Latin Dictionary* (Oxford, 1879), s.v. *deduco* I.A.b に, 「限界を示して」 (“Stating the limit”) 用いられた *deducere* の例として挙げられている。
23. H. Rackham, *Cicero: De Finibus Bonorum et Malorum*, 2nd ed., LCL 40 (Cambridge, Mass., 1931), p. 74. (21) は H. Merguet, *Lexikon zu den philosophischen Schriften Cicero’s*, 3 Bde (Jena, 1887–94; Nachdr. Hildesheim, 1971), s.v. *via* II.2 において, *deducere* と結びついた *in* の目的語となった *via* の例として挙げられている。
24. W. D. Hooper, *Marcus Porcius Cato: On Agriculture; Marcus Terentius Varro: On Agriculture*, rev. H. B. Ash, LCL 283 (Cambridge, Mass., 1935), p. 138.
25. M. Godden, *Ælfric’s Catholic Homilies: The Second Series, Text*, EETS s.s. 5 (London, 1979). ウルガータの対応箇所については M. Godden, *Ælfric’s Catholic Homilies: Introduction, Commentary and Glossary*, EETS s.s. 18 (Oxford, 2000), p. 662 参照。
26. W. W. Skeat, *The Gospel according to Saint Matthew and according to Saint Mark* (Cambridge, 1887, 1871; Nachdr. Darmstadt, 1970).
27. III Rg 11:33, 38; Ps 80:14; Za 3:7. ウルガータの語句の検索には *Novae Concordantiae Bibliorum Sacrorum iuxta vulgatam versionem critice editam quas digessit B. Fischer*, 5 tom. (Stuttgart-Bad Cannstadt, 1977) を使用した。
28. Dt 10:12; 11:22; 19:9; 26:17; 28:9; 30:16; Ios 22:5; III Rg 2:3; 8:58; Ps 118:3; 127:1; Is 42:24.
29. さらに同種の表現の例として, *via* の単数をそれぞれ “Domini” (主の), “Dei” (神の) が修飾した, “et dereliquit Dominum Deum patrum suorum et non ambulavit in via Domini (IV Rg 21:22)”

（彼は、彼の先祖の神である主を捨て、主の道において歩まなかった）、“*si in via Dei ambulasses habitasses in pace sempiterna* (Bar 3:13)”（もしあなたが神の道において歩んでいたならば、永遠の平和のうちに住んでいたであろうに）を挙げる事ができる。

30. *Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament*, begr. v. G. Kittel, hrsg. v. G. Friedrich, 11 Bde (1933–79; Nachdr. Stuttgart, 1990), Bd. 5, s.v. ὁδός [p. 51] には、このウルガータの表現に対応する、七十人訳に繰り返し現れる表現 “πορεύεσθαι ἐν ταῖς ὁδοῖς αὐτοῦ οἶα”（彼の道において歩む、など）について言及がある。

31. Augustinus は (1) の「私を永遠の道において導き給え」 (“*et deduc me in uia aeterna*”) について、「私をキリストにおいて導き給え、ということ以外に彼は何を述べていようか。つまり永遠の命である人を除いて、誰が永遠の道であろうか」 (“*Quid aliud dicit, quam, deduc me in Christo? Quis est enim uia aeterna, nisi qui est uita aeterna?*”) と解釈を述べる (E. Dekkers et I. Fraipoint, *Sancti Aurelii Augustini Enarrationes in Psalmos CI–CL*, CCSL 40 (Turnholti, 1956), p. 2011)。